

HFNA ほどのように MSFA と関係づけられるか

—これまで不問であった HFNA と MSFA との関係について—

黒田 航

(独) 情報通信研究機構

けいはんな情報通信研究センター

1 はじめに

FOCAL [6, 9] では (意味) フレーム (semantic frames) という概念を二つの —見かけは別個の— 対象を表わすのに用いている。特に [8, 5] などで (意味) フレーム階層ネットワーク分析 (Hierarchical Frame Network Analysis: HFNA) が記述する意味フレームと複層意味フレーム分析 (Multilayered Semantic Frame Analysis: MSFA) の意味フレームの関係が整理されておらず、これは一部で混乱に基になっているようだ。このことは、現時点での FOCAL の問題の一つである。この短い文書では、その点に関して簡単な注意を与えておく。

2 HFNA と MSFA との関係

2.1 複合フレームと基本フレームとの区別

公式には言及されていないが、私は HFNA が記述するのは**複合フレーム Complex Frames (CFs)**、MSFA が与えるのは一つの CF の**基本的フレーム Basic Frames (BFs)** への分解だと考えている¹⁾。ただ、この点に関する十分な検討は行われておらず、将来的な変更を予想される。特に「基本的」という特徴づけには過度の読みこみをしないようお願いしたい。私が基本的フレームと読んでいるものが、小さな規模の、より原始的な意味フレームであることはまちがいないのだが、それが意味フレームの“原子”を与えるとか、“元素”を与えるとは期待しないようお願いしたい。特に言語学者はそういう — 私の目から見ると大それた — 期待を抱きがちであ

るだけに²⁾、特に強調しておく。「概念の元素を求めて」あてのないの旅に出た人は、これまで一人も生きては戻れなかった。

あくまで可能性として言えば、将来的には概念の元素を発見するということが可能かも知れないが、現時点でそれが可能である保証はまったくないし、概念構造の表示の分散性 — これは概念の媒体である脳の特徴に由来するものである — を考えても、そういうものを手にできる可能性は低い。このような理由により、以下の内容は将来的な変更を受ける可能性を加味して読んで頂きたい。

2.2 フレームをあまり実体的に考えないように

私たちが FOCAL の枠組み [6, 9] である対象 x を意味フレームと呼ぶ場合、 x の規模や複雑性に依存しないことは [7] で明らかにした通りである。

また、この論文で確認したことだが、意味フレームの概念に非規模依存性、非複雑性依存性が伴っている故に、ある概念構造 x を (意味) フレームであると呼ぶこと、見なすことは、 x の特徴の解明に不可欠な明示性が伴っておらず、空虚である。言語学者はフレームを (例えばスキーマなどと同様に) 非常に安易に「実体」と見なしがちなので、この点には特に注意しておく必要があると思われる。何らかの形で図示できることは、それが具体的実体であることはまったく意味しない。**スキーマもフレームも本質的に抽象的な実体なのである。**この点を理解し損なっている認知言語学者は多い。

スキーマ群、フレーム群は規模によらない情報のあれこれを符号化する抽象的な実体だからこそ有用である。極端な話をすると、脳の内部では「具体的」な情報など、まったく処理されていない。脳内の情

¹⁾ この見地に立つと、Berkeley FrameNet [1] が取り組んでいるのは基本フレームのデータベース化である。

²⁾ その理由が、体系性の錯覚に由来する根拠のない楽観主義故なのか、自分の問題解決能力を過大評価故なのかは、ここでは不問にしておく。

報が具体的なのは、それが外界への index をもっているとき、そのときに限られる。今でもヒトがイメージ化の能力をもつメカニズムが解明されたというにはほど遠い現状だが、わかっている限りでは中枢性の現象ではなく末梢性の現象である部分も大きい [3].

2.3 HFNA の内実は MSFA の重ねあわせ

先日の KLC (2005/02/26) で FOCAL 研究グループの一人である中本敬子が最近の結果について発表を行った³⁾この発表の際に山梨正明 (京都大学) 氏から、コメント兼質問として「台風が東京を襲う」のような文の理解で、「東京」が〈ヒトの集まり〉も〈建造物 (の集合)〉も〈行政〉も〈政治体制〉も意味するが、そういう事情は意味フレーム分析にはどう反映されるのか?」といった質問があった。これは要するに、これまでの文献では明示しなかった MSFA が HFNA にどう関係づけられるかという問題に関係する。私が今までそれを明確にしなかったのは、不徳の致すところである。それは私にとっては自明のことだと思われたので、言及する必要に気づかなかったのである。

この問題は、前述のように、HFNA が記述し、特定しているのは、実際には単一のフレームではなく複合フレームだと考えれば、難なく解決することができる。従って、山梨氏の指摘は、私の解釈がまちがっていないければ、複合フレームとして〈自然災害フレーム〉の内実はどうなっているのか?という問題提起に帰着することができる。HFNA の内実は—かなり簡略化して言うとすれば—複数の MSFA の「重ねあわせ」だからである。

2.4 MSFA と HFNA の実質的な関係

重ねあわせが実際にどんな操作であるのかには明確な定義が必要である。それは今の段階ではできておらず、単に可能だろうという見通しがあるだけであるが、見通しの下で話を進めると、例えば、山梨氏からの注文は、〈被害の発生 (大規模)〉は〈どんな形で〉〈誰/何に対して〉起こるのかを明示することが不可欠であり、そうして欲しいという期待だと見なすことができるだろう。この場合、複合フレームは Lakoff [4] で ICM と呼ばれているもので、基本フレーム (の少なくとも一部) は Lakoff と

Johnson [2, 4] で特にイメージスキーマと呼ばれているものに該当することには注意を促しておいてよいだろう。

このような内実を、手間暇かけて与えることに抵抗を感じる言語学者は多い。実際、KLC の発表の際に意見の一つとして出た「細かい粒度の意味フレームの内実を一つ一つ手書きするのは、あまりに面倒ではないのか?」も、その旨の意見だったと思われる。

だが、これも HFNA の内実が MSFA で (ある程度は) 記述できるということことがわかれば、原理的に困難な課題ではないことがわかる。一つ難があるとすれば、それが (かなり) 面倒だということだ。確かに、手抜き言語学に染まった人には向いていない。

いやしくも現象 x を y で「説明」しようとする人ならば、 x の説明項 y が明示的に定義されていない限り、自分の説明は破綻しているのは承知しておくべきである。この前提の下では、言語を ICM で説明しようとする人が ICM に十分に明示的で精緻な特徴記述を与えようとするのは、当然の行いである。なのに、手抜き言語学者は誰も面倒臭がってその泥臭い仕事に手をつけようとはしない—こんな説明の、いったいどこが説明か?

2.5 これは言語学か否か

MSFA/HFNA が記述を与えようとしている対象は厳密に言語学の対象とは言い難いものであることは、私も承知している。

だが、その一方で一つのことは明らかなのである: この仕事は**経験的に妥当な仕方で語句の意味を定義する**という仕事であり、それがどういう名前と呼ばれようと、言語学であろうとなかろうと、誰かによってなされる必要のある仕事であり、その仕事になされていなかったことが、意味に関する議論が長年に渡って混乱を極め、不毛であったことの根本的な原因なのである。

3 終わりに

言語学の非科学性にうんざりして、事態を改変するしかないと心に決めたら、あとはネコに鈴をつけるか、つけないか—単にそれだけの話だ。手間は重要じゃない。手間がどうか言って労力を出し惜しむ人間は、今の言語学の空虚さを実感していない、幸せな連中なのだろう。

昇竜は汚水を好まず。

³⁾ 発表資料は <http://cls1.hi/h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/Nakamoto-focal-talk.pdf> からダウンロード可能。

参考文献

- [1] C. J. Fillmore, C. R. Johnson, and M. R. L. Petruck. Background to FrameNet. *International Journal of Lexicography*, Vol. 16, No. 3, pp. 235–250, 2003.
- [2] M. Johnson. *Body in the Mind*. University of Chicago Press, 1987.
- [3] Stephen M. Kosslyn. *Image and Brain: The Resolution of the Imagery Debate*. MIT Press, 1994.
- [4] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』 (池上 嘉彦・河上 誓作 訳). 紀伊国屋書店.]
- [5] 中本敬子, 野澤元, 黒田航. 動詞「襲う」の多義性: カード分類課題と意味素性評定課題による検討. 認知心理学会第二回大会口頭発表, p. 39, 2004. [<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/Nakamoto-et-al-CogPsy2004-Original.pdf>].
- [6] 中本敬子, 黒田航, 野澤元, 金丸敏幸, 龍岡昌弘. FOCAL/PDS 入門: フレーム指向概念分析/並列分散意味論の具体的紹介. [未発表論文: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/introduction-to-focal.pdf>], 2004.
- [7] 黒田航. “(意味) フレーム” という説明概念の再規定: FOCAL を知的に衛生的な枠組みにするために. [未発表論文: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/revising-the-frame-concept.pdf>], 2004.
- [8] 黒田航, 中本敬子, 野澤元. 状況理解の単位としての意味フレームの実在性に関する研究. 日本認知科学会第21回大会 発表論文集, pp. 190–191, 2004.
- [9] 黒田航, 中本敬子, 金丸敏幸, 龍岡昌弘, 野澤元. フレーム指向概念分析 (FOCAL) の目標と手法: Berkeley FrameNet を超えて. [未発表論文: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/focal-manifesto.pdf>], 2004.